

オットー教授の著 *Das Heilige* 『聖』に就いて

木場了本

著者ルドルフ・オットー Rudolf Otto 氏は主として倫理學で名を知られて居るレオナルト・ネルソン Leonard Nelson や數學者ゲルハルト・ヘツスエンベルク Gerhard Hetschberg などと共にゲツチンゲン大學を中心とする所謂新フリース學派に屬する人で、現在はマールブルク大學神學部の正教授であつて獨逸の新敎神學界及び宗敎哲學界に於いても最も重きをなして居る一人である。氏の著者としては Kantisch-kristliche Religionsphilosophie und ihre Anwendung auf die Theologie, 1909 及び Das Heilige: Über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen, 1. Aufl. 1917; 8. Aufl. 1922 が重なるものであるが、近來他宗敎に對するより善き内面的理解の下に宗敎の本質を明にせんとする動機から Texte zur indischen Gottesmystik といふ叢書を出版しその第一卷には Vishnu-Nārāyaṇa 第二卷には Śiḍhānta des Rāmānuya を出し、第三卷は一昨年夏頃印刷中であるを聞いたが、その何であるかを未だ知らない。Das Heilige の第八版の附録には Bhagavad-Gītā 及び回敎建築術中の『空』に就いての論文があり、又第九版を出す際には鈴木大拙氏が雑誌 "The Eastern Buddhist" に發表せられたものにより禪宗に關する論文をも添へる計劃を有せられ、又昨年自分が贈呈した南條文雄師の『梵文入楞伽經』に就いても既に研究に着手したといふ便りがあつたからその結果も遠からず發表せられることであらうと思ふ。以下、先に擧げて氏の二主著によつて氏の立場を紹介しやうと思ふ。

一

フリース系の宗敎研究に對する興味はカント系の宗敎研究に對して起る。カントによれば宗敎の

根本をなす觀念は理論的には Hypothese であり、實踐的には Postulat であつて、宗教は豫想せられねばならぬ條件として指し示されては居るが、宗教そのものゝ積極的理解は不可能なものとせられて居る。ウインデルバンドの如きも宗教に關する最後の論述として『此の最後の問題（價值と現實との問題）の不可解は事の本質に基くのであつて、我々の本質と認識とに限りあるとを感せしむる神聖なる祕密である。我々は此限界に甘んじなければならず、又此の最も内奥なる生命點に於いては吾々の認識及び理解は我々の本質の他の一面たる意志の達するより以上に達する事が出来ぬといふ自覺によつて己れの限界に甘んじて宜いのである。何となれば現實に於ける價值の二元性は意志に對してその活動に缺くべからざる條件であるからである。……故に我々人間にとつて願ひ無き喜悅は現象世界の有爲の云爲に纏縛せらるゝ意志の不安定より生ぜずして、永遠なる諸價值が自現する純粹思惟と見性との靜寂からのみ生ずる』と云ひ、その純粹思惟と見性とに現るゝ宗教そのものは宗教哲學に於いては説くべからざるものとした。フリース (Jakob Frierich Fries, gest. 1843) はかゝる斷念はカントが凡てのものに論證を要求する『合理主義的偏見』より生ずるものとなし、カントが論證によつて單に指し示したものを己れの内的經驗の内に内省觀察して、それが由つて生ずる直接認識を擧證することによつて、その積極的理解が得らるゝものとし、カントが何故にの問題 quaestio juris を解く條件として立證したものに更に quaestio juris を提出して内的經驗の自證を示

し、カントの先驗的證權法 *transcendentale Deduktion* に對して人性學的證權法 *anthropologische Deduktion* を採り宗教そのもの、積極的理解を求めた。此點に彼の宗教哲學に對する興味を中心がある。

彼によれば絶對的實在、靈魂、自由、神等の理念に表はさるゝ理性の直接なる知的認識はそれ自身にては冷たく空虚なるものであるが、意志及び感情によつてその内容が與へられて始めて生命ある眞實なものとなる。而してかく道德的意志によつて生命づけられた認識は信仰であつて、その信仰はカントの意味の信仰の如く道德的興味に基く要請を眞實らしく思ふことでなくして、感官によつて捕へ得ず見得さるものを確實なりとする道德的意識の直接なる宣言である。しかしそれは尙ほ未だ現實的に積極的に體驗せられたものでなく現實に對立する或るものである。此道德的意志の云表はす無限なるものを更に有限なるものゝ内に現實的に認識せしむるものは豫感 *Das Ahnen* である。此豫感によつて知の認識と信の認識とは統一せられ最も直接なるものとして現實的に體驗認識せらるゝのである。

豫感とは自然と我々自身とその他凡ての存在凡ての出來事とが超越的實在の眞の現象たることを感情の直接生活に於いて眞理として體驗するとである。吾人は概念的に明かなる個々の物理事實事に接して云表はし難き或物を感じる際に、その感せられたものをその具體的なる事物にプレディ

ケートとして附加して一種の判断を得る。此判断は合理的に明かなる概念をプレディケートとするものでないから論理的判断でないが、亦一種の情感上の判断である。かゝる判断のプレディケートとなる、概念的に云表はし難き或るものが即ち豫感せられたものである。吾々が美しい schön とか崇高 erhaben であるとかいふ言葉によつて示すものがそれである。これは概念的認識に對しては全く消極的のものであつて全く他のものもの das ganz Andere として知られるのであるが、感情そのものに對しては不明に感せられたもの dunkel Gefühles として最も直接なリアル real なものである。此豫感によつて永遠の眞理が吾々の内に直接鮮明なものとなつて來るのである。故に豫感とは有限的事物によつての『理念の共鳴』Anklingen der Idee である、即ち有限中に無限が感知せられるのであつて、プラトーンが回想 Anamnesis と稱したものに外ならぬ。道徳的信仰の有する理念が與へられた有限の事物を美及び崇高の感情の豫感によつて己れの内に包攝する時に完全に宗教的のものとなつて來る。即ち不死は吾人の永遠の規定 ewige Bestimmung として、自由は責任 Zurechnung として神は自然界に對しては世界の創造者支持者として、精神界に對しては神聖なる立法者乃至全知的審判者として感せられるのである。

かくの如く理性の直接的な知的認識に基く理念が道徳的意識によつて信仰の理念となり、信仰の理念は更に美及び崇高の豫感により完全に宗教的理念となるのであるが、その美及び崇高の豫感とは

如何なるものであるか。フリースによれば美とは事物の合目的に調和性であり、崇高とは數學的には空間的の絶對的宏大性であり、力學的には力の絶對的全能を云ふのである。然かし爰に大きさといふ力といふも、それが絶對的であるが爲に普通の大きさ又は力の概念に對しては全く別な *ganz anders* 消極的のものであるが、感情に對しては極めて積極的なものである。かくして彼は豫感の眞理性を内省の自明なる事實として積極的に權利附けるのである。

然るに彼に於いては宗教に特別な美及び崇高の豫感が美のそれらの豫感から明に區別せられない。宗教を美から區別するものは何であるか。又理念は凡て合理的 *rational* なものであるが、然かもその理念が豫感に於いては合理的理念のそれとは全く別なる *ganz Anders* として非概念的・非合理的 *irrational* なるものとなるのであるが、その *irrational* なるものは如何なるものであるか。彼に残された此等の問題を解き、豊富なる宗教史上の材料によつて宗教の特性を明にするのが *Das Heilige* 一卷の主眼である。

二

氏は先づ普通宗教の本質を示すものとせらるゝ *Das Heilige* 『聖』といふカテゴリーに就き、この語が今日ではカントが自然的傾向性を含まない道徳的に完成せる意志を聖と呼んだことなどからして普通倫理的合理的な意味のみに解せらるゝ傾があるけれども、本來は道徳的概念的に盡されない

非合理的な宗教に特有なものを指し示す言葉であることを語學的に證明し、この言葉の内より道德的合理的要素を引去りたる非合理的要素のみを特にタズ・スミノーズエ Das Numinose (ラテン語の numen 即ち未だ精密に規定せられない超自然的なものといふ語を形容化したもの)と名け、それに道德的合理的要素の加はりたるダズ・ハイリゲを以て正しく宗教のカテゴリと定め、その非合理的要素を明にしつゝ、それと合理的要素との關係を説くのである。

然らば此スミノーズエといはるゝ非合理的なるものは如何なるものであるか。それは吾々の心情の根元に直接に與へられるものであつて明に定義することは出来ない。けれども、それにあらざれどもそれに關係を有するものを示すと同時に、それに對立するものを示すことによつて、その如何なるものであるかに思ひ至らしむることが出来る。

スミノーズエは先づ我々の自己感情中に反射する時に吾々に被造物者の感情 *Kreaturgefühl* を與へる。例へばモーゼ書第一の一八の二七にアブラハムが神に向つて『我れ——土と灰なる我は主と語る事を敢えてする』と云つた時の感情の如く極度に自己を弱小にして憐れなるものと感ずる感情であつて、シユライエルマツハーの云ふ絶對依屬の自己感情よりも更に切實なるものである。而してシユラヘルマツヘルの考へた如く宗教感情の内容はかゝる自己感情に基くのでなく、凡て自己感情は自己以外のものに直接關係する他の感情要素即ちスミノーズエが主觀に與へる影であり反射である。

然らば客觀的に我れ以外に於いて感ぜられるヌミノゾエそのものは如何なるものであるか。吾々が救濟の信仰、信賴、愛などよりも更に深く強き宗教感情の内に眩惑させる程に強く吾人の心を動かす最も深奥なるものを觀察し、又その感情の強き發表や、宗教的儀式の莊嚴さや、宗教的記念碑、建築、堂宇、教會等の上に現れて居るものに就いて考ふれば、それは畏怖せしむる神祕 *Mysterium tremendum* であると云へば最も事實に近いであらう。而して此神祕の感情は時には深き歸依心の内に靜かに柔かに動くこともあるが、又激情興奮の内に粗野に近きほど猛烈に現るゝこともある。而してかゝる神祕は概念に對しては全然消極的であるが、その積極性は感情に於いて純粹に體驗せられる。

然らば此ヌミノゾエの中畏怖せしむる *tremendum* の要素とは如何なるものであるか。それは自然感情の恐怖に類似したものであるか、しかもそれとは全く異なる特有な感情である。モーゼ書第二の二三の二七に神が『我が畏怖を汝に下さん』と云へる時の畏怖、又はルーテルが『自然人には神を畏怖するといふことがあり得ない』と云つた場合の畏怖であつて超自然性を有する恐れである此の畏怖が原始宗教に現れては惡魔怪靈の怖れとなり、高等宗教に於いては『神前にあり、我等の内なる凡ては黙して心より彼の前にひれ伏せよ』といふテルステゲンの歌に現れて居る様な畏伏となる。

而して此畏怖は同時に近づき難き方の威嚴 *Majestas* を示す。シュライエルマツハーの依屬の感情は此威嚴の反射感情に外ならぬ。彼は此反射感情より神の世界創造と支持との觀念を導出さうとしたが、しかし直接に力の威嚴に對する感情には因果的反省の存する餘地はないのであるから、創造の信仰は全く此感情に關係のない別な起源を有するものでなければならぬ。従つて先に擧げたアブラハムの持つた感情も造られたといふ感情でなく造られたものゝ持つ感情である。

畏怖せしむるものには *Majestas* の外に更に一つの要素を含む、即ちスミノーズエのエネルギーがそれである。これは *Majestas* の靜的なるに對して動的生命的なものであつて、原始的には惡魔的な神の表象を生じ、進んでは活ける神の表象を生せしめる、故に此要素は合理的思辨と定義とに基く哲學的な神に對して最も強き反抗を惹き起すものである。

次に畏怖せしむる神祕といふがその神祕それ自身は如何なるものであるか。今之を明にする爲に *Mysterium* 其ものに特有な反射感情を示せば *Empor* 即ち絶對的に不可思議なるものに對して起る極度に無感情となれる驚異がそれである。自然界にも此の *Mysterium* に類するものがあるけれどもそれは只消極的なる不可解なるものであつて *Mysteriozus* (神祕的) と形容せらるべきものでない。宗教的の *Mysterium* は吾々の見慣れ知り慣れたものとは全く反對し、吾人に極度の無感覺なる驚嘆を與ふる全く別異なもの、*Das Ganzandere* であつて、凡ての有を否定するが而かも感情

そのものに對して最も積極的な無又は空そのものである。

ヌミノゾエはかく *tremendum* であつて冒し難く近づき難きものであると共に一方では亦同時に魅する力を有し、強き思慕と喜悅とを喚び起す誘引的なもの即ちフアスキナンス *fascians* である此非合理的にして誘引的なフアスキナンスに並行しそれを形象化 *schematisieren* する合理的要素が即ち、愛、慈悲、同情、憐愍等である。

三

かくの如くヌミノゾエは畏怖せしむると同時に愛慕せしむる反對的調和であるが、美學の範圍に屬するそれに對應するものを示すことによつてその如何なるものであるかを更に明にすることが出来る。それは即ち崇高 *erhaben* とヌミノゾエとの間に於ける感情の對應である。崇高はカントも云へる如くに解くことの出来ぬ概念 *unaußwickelbarer Begriff* であつて、その特徴をなし條件となるものを擧ぐることは出来るが、崇高の印象そのものゝ本質を解き明かすことが出来ないのはヌミノゾエと同様である。又崇高は我々の心を謙虛ならしむると同時に亦凡てのもの以上に高めるといふ點に於いても亦ヌミノゾエと相類似する。それ故二者は互に相喚起し合ひ、一から他に移り行くのである。しかし兩者は互にそれ自身に於いては別なるものであつて、一から他に移り行くど云つても感情そのものが移り行くのではなくして、我が一から他に移り行くのである。凡て感情はそ

れ、種類の異なるものであつて、一の感情が他の感情に發展するといふことは一般にあり得ない。宗教の發達を新發生 Epigenesis 又は自然發生 Heterogenesis として論ずるは此見地よりすれば誤りである。

スミノーズエの發展を觀察するに就いても亦此點に注意せねばならぬ。スミノーズエが發展する時は美や善の要素と共に多くの合理的な要素を伴ひ所謂聖 das Heilige といふカテゴリーによつて云ひ表はさるゝものとなるけれどもそれらの要素は直に宗教ではない。宗教の本質はスミノーズエといふ非合理的なものそのものにある。我等は爰にダス・ハイリグに於ける非合理的要素と合理的要素の結合關係を明にせねばならぬ。

相伴ふ二つの觀念又は感情の結合には必然なるものと偶然なるものがある。カントが因果性の範疇を具體的ならしむものとして時間の形象 Schema なるものを説いて居るが、それに倣つて今スミノーズエが具體的に發展する際にとる定形的なもの合理的なものを形象 Schema と名け、スミノーズエが形象的なる要素との必然なる結合に於いて發展することを形象化 Schematisierung と名けるその結合の必然と偶然はその發展に於いて二者が正比例をなして結合するや否やによつて決定せられる。この見地よりして吾々は崇高をスミノーズエの正當なる形象として認めなければならぬ。吾人は此關係を音樂そのものとそれを現す歌詞との關係によつて會得することが出来る。音樂そのもの

のは非合理的であるか、謠はるゝ歌詞はその形象であつて合理的である。

宗教のカテゴリエなるダス・ハイリグはスミノーズエの形象化したものであつて非合理的要素と合理的要素とをその内に含む。宗教史の任務はスミノーズエの形象化を明にするに在る。宗教史に於いて主として明にせられる神の觀念の倫理化も勿論スミノーズエの形象化たる限りに於いて意味を有する。

四

然らば此ダス・ハイリグは如何なる意味に於いて先驗的カテゴリエであると主張せられるであらうか。それはカントの場合の如く論理的必須條件、意志の要求の必然、價値的必然の意味での先驗性でなく、内省の事實そのものゝ自明性に基く先驗性である。即ちダス・ハイリグは感覺的なるものより發展せるものにあらずして最も深き意味での純粹理性、若しくは更に適切には神祕主義者が精神根柢 *Seinleugnd* と呼べるものに素質 *Anlage* として備はれるスミノーズエの發展せるものとして先驗的である。スミノーズエは勿論感覺的經驗以前及びそれなしには現れず、その内に、その間に現れ、それに依つて生ずるのであるけれども、それから生ずるのではなく、素質としてそれに先だつ原本的なものである。スミノーズエの感情は自然的感官知覺の與ふるものと全く異なるものであつて、感官的知覺的に與へられたものに對する特別或なる判斷であり評價であり、感官的

知覺の世界に屬せず、感覺的知覺の世界以上にあるものとしてこの世界に附加せられる對象を定立あつて、それ自身感覺的知覺でもなく又感覺的知覺の變化せるものでもなく全く獨立のするもので根源を有するものである。その根源はカントの理論的及び實踐的理性よりも更に深い意味での純粹理性にある。而して宗教は此深き理性にその根源を有するといふことに於いて先驗性と普遍的妥當性と觀念的ならざる事實性を有する。故に宗教の後驗的發達説は宗教の根源から發足せず、正しき説明の原理を有せずして、宗教そのものに本質的に關係なき要素によつて宗教の事實を中途より説明せんとするものである。

かくの如く宗教は何等の前提にも目的にも道德にも要請にも由らず、それ自らの根源を有するものであるとすれば、何故にその實現發展に於いて必然に眞善美等の範圍に屬する形象的合理的要素を取つて形象化せなければならぬのであるかと云へば、それには何等他の理由はない、只だそれが感情に於いて自明であるといふ事實によるのみである。此自明性は此等の要素の必然的關聯に就いての感情に於ける先驗的認識を豫想しなくては解き難き問題に終る。その關聯の論理的必然性は決して發見せられない。ソクラテスがプラトンの『國家論』に於いて『神は單純であり爲すこと言ふことに於いて眞實であり、自ら變せず、人を欺かない』と云へるに對し、アグイマントスが『今さう云はるれば、それは私にも全く明かなことである』と答へた。此場合に彼はソクラテスの言の

論理を認めたのではなく、その言の表す事實そのものを自ら見たのであり、ソクラテスはアダイマン
トスも亦有する或先驗的判斷に訴へ其判斷を喚起したに過ぎない。我々は此質朴なる問答の中に最
も深き意味での先驗的に眞なる認識即ち判斷のあることを認めねばならぬ。

然らば合理的要素が先驗的原理によつて非合理的なるものに如何に結合して宗教の本質なる非合
理的ヌミノーズエが形象化せらるゝか。怖畏の要素は正義、道德的意志、反道德的なるものゝ排斥
神の怒の觀念の如きものによつて形象化せられ、魅誘的要素フアスキナンスは善意、慈悲、愛等に
よつて形象化せられて、神の怒と反對調和をなす恩恵といふ總和を生ずる。神祕の要素は神の此等
の凡ての合理的屬性が皆絶對的であるといふ觀念によつて形象化せられる。絶對的なるものは、そ
の絶對化せられるものゝ性質そのものによつて我々の捕捉力を超越するのでなく唯だその形式のみ
によつて然るのであるから、絶對的なるものは未だ神祕そのものではなく神祕そのものゝ形象であ
る。神祕そのものは性質に於いても本質に於いても、その形象たる絶對性を有する合理的なものど
は全く異りたる別のもの *das ganz Andere* 即ち非合理的なものであるから、前の二要素は性質上に
於いて共通する所ある形象を取るのであるが、神祕の要素そのものは性質上に於いても全く異り唯
だ形式上に於いてのみ關係ある形象をとるのである。

かくして宗教は非合理的要素が完全に保たれることによつて合理主義に墮せずしてその生命を活

潑に保ち、合理的要素の飽和によつて狂信又は神祕主義に陥らず、性質的規定ある、文化的、人類的宗教となり得るのである。故に宗教の優劣の標準は此兩要素の調和並行如何にあるのである。

×

×

×

×

以上は『ダス・ハイリゲ』一巻の内に於いて自分が興味を以て跡けた思想の大綱である。此他に尙ほ此思想を幾多の宗教史上の材料に就いて究明した部分が多いけれども今はそれを略せねばならぬ充分なる跡付けをする餘裕を有せず甚だ不完全なる叙述に過ぎぬのであるが、聊かの參考にもならばと思ひて之を發表する。